
異常で過負荷な臆病者と無礼者

熱血バレー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常で過負荷な臆病者と無礼者

【Nコード】

N6296X

【作者名】

熱血バレー

【あらすじ】

神の手違いで死んだ主人公、二夕子樹^{ふたしじゅき}。証拠を隠すため転生させられたのは、めだかボックス？
二重人格である主人公は、果たしてどうなるのか？
(作者は、文才の欠片もないのでご了承ください)

ブログ 上(前書き)

まだ完結していないのが2つもあるのに投稿しました。この作者はバカです。

プロローグ 上

「ここはどこ?」

眼鏡をかけた少年が目を覚ます。

ここは、真っ白で何もない世界だ。そして、少年の前に一人の男がいた。

「ここはどこかって? 現世と冥界の狭間さ。君は、さっき死んだ。」

「???」

「死因は、交通事故。少女を助けようとしてね。」

少年は、思い出す。

数時間前

登校途中、居眠り運転のトラックが少女をはねようとした。少年は、なにを考えたのでもなく勝手に体を動かしていた。それで死んだ。

「思い出したかい? まー君が死んだのは僕の手違いでさ。君に「あのーあんだ誰ですか?」は二次げん「無視すんなー」。葬式始めんぞ。」

「ごめん、ごめん僕は神さ。見習いだけど……。何だ今の殺気

「？」

「神??？」

「そう神だ。見習いだけど・・・。っで話続けていい？」

「どうぞ、自称見習い紙さん。」

「紙じゃなくて神だから。後見習いを強調するな。」

「すみません。自称神さん（笑）」

「（笑）邪魔だよねー。もういいよ。っでさっきの続きね。」

「つまり、神の手違いで死んだ俺を、証拠を隠すために転生させるってことだろ。」

「??（全部言われたよ。）（御察しの通り。で、君たちのことを調べたけど、『めだかボックス』に転生してもらっよ。」

ブローグ 上（後書き）

ブローグなのに二話になりそうです。なんて、文才がないんだ。

ちなみに、ニタ子っていう地名は実際にあるそうです。

プロローグ 下(前書き)

プロローグ2話目です。

プロローグ 下

「御察しの通り。で、君たちのことを調べたけど、『めだかボックス』に転生してもらおうよ。」

「君たちってことは人格が二つあることに気づいたか。つま、死因を思い出したところから裏が出たな。あとこのことは、アイツには内緒だからな。あとめだかボックスの世界で原作ブレイクしてもいいの。オレのためにも、アイツのためにも。」

「はー、わかった。で、気づいているとは思っけど現世の時点であの子は、異常を持ってんね。」

「アイゲーム見稽古のことか？」

「それぞれ。で、転生するに当たってちょっとプレゼントがあるんだ。」

「何だ、それは？」

「神からの贈り物プレゼント

？お金の心配なし

？それぞれボクから異常と過負荷をプレゼントアブノーマル マイナス

？お互い5つまでお願いOK

ただし、？であなたは異常は持てない。逆も一緒。

こんなもんでどうですか。」

「まあいい。で？はなんだ。オレにはどうせ過負荷だろうが。」

「君には、裏切りの樂園を、あの子には、憎まれ知らずをあげるよ。」

「面白い、じゃーそろそろ連れてってくれ。めだかボックスの世
界へ。」

「OKー逝ってらっしやい。」

「おい、字がちg」

さあ、第二の人生、スタートです。

プロローグ 下（後書き）

見稽古は、刀語の鑢七実を参考にしました。
また、裏切りの樂園は、Paradise Lost のサビから
とりました。

両方大好きです。
そして、最後に

プロローグ長!!

登場人物紹介

二夕子樹 ふたごいつき 表人格

性別 男

見た目 そこそこイケメン。というより女顔。
いつも眼鏡をかけている。髪は、基本黒。

一人称 ボク

年齢 16歳

好きなこと、もの 人助けをしている人
野菜

嫌いなこと、もの 人が傷つくこと
動物（魚も含む）
臆病者（自分）
肉

アフノーマル
異常
アイゲーム
見稽古

ただで、相手の異常や過負荷を使うことができる。また、それと同時に、弱点も見極められる。ただし、最初の1回は、50%しか使うことができず、異常や過負荷自体を無効にすることはできない。現世で、すでに使っており、皆から恐れられていた。

見た

憎まれ知らず
アンリセント

神に転生するときにもらった。どんな動物にも敵視されない。ただし、人間には無効。また、自分は過負荷の対象にされない。これは、ON、OFFの切り替えができる。

二夕子樹 ふたごいつき 裏人格

性別 男

見た目 表とそう変わらない。ただし、少し目がつり上がる。
眼鏡はかけていない。髪は、基本白。

一人称 オレ

好きなこと、もの 人を傷つけること
人を貶すこと
肉

表人格

嫌いなこと、もの 偽善者

ナルシスト（誰のことかお分かりですね）

敬語

野菜

過負荷 マイナス
裏切りの楽園 トレチャリリーティル・ナ・ノーグ

異常のみ、相手から奪い使うこともできる。これも、ON、OFF可能。また、無効にできない代わりに、奪った異常は200%使う

ことができる。これは、安心院さんにも有効。さらに、人も操ることが
できる。(1人だけ)

まーこんな感じですよ。また、異常や過負荷は増やしていきますの
で、ある程度たまったら能力のみ紹介したいと思います。

オレからボクへ(前書き)

ついに、転生しました。

オレからボクへ

「ここは、どこだ？」

ニタ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「何だ、これ？」

『これを読んでいるということは無事転生できたんだね。もし君が裏人格なら頼みがあるんだ。机の下に表人格用の手紙があるからこの手紙を読み終わったら、その手紙を机の上においてほしい。つまり、裏人格用の手紙を読む。その手紙を抹消。机の下の表人格用の手紙を見つける。机の上に置く、ってわけだ。何でこんなことをするのかというと、この世界にまだ裏人格キミは、存在してはいけな
いんだ。でも大丈夫。いつか君も原作世界にいてもよくなるから。
まーそんなわけで当分君は登場しないでね。それじゃーバイバーイ。

by神』

「何の予告もなしにオレをこの世界に連れてきやがって、それでこの手紙か。まったく世間知らずもほどがある。(オレがいえないが) まあいい。オレは、少し寝るか。」

オレからボクへ（後書き）

最後に、

裏人格「ここは、どこだ？」

神「もちろん、箱庭総合病院ですよ。」

表人格「つ、ついに来たー。」

ちよつとキャラ壊れました（笑）

スタート 第2の人生（前書き）

二話続けて短いですねー。

あと、樹の顔を女顔にしました。でも男に代わりはありませんよ。

スタート 第2の人生

「ここは、どこ？」

ニタ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「何、これ？」

『これを読んでいるということは、無事転生できたんだね。真っ白な世界でも会ったと思うけど覚えているかい？ボクは、神さ。で、君はボクの手違いで死んでしまったんだ。だから君にはめだかボックスの世界に転生してもらったんだ。突然の話で驚いているかも知れないけど君の好きな漫画なんだからいいでしょ。この世界では、原作ブレイクしてもいいし、異常も使ってもいいよ。ちなみに君の持っている異常はアイゲーム見稽古とアンリセント憎まれ知らずなんだけど分からなかったら第3話を見てね。あと、そろそろ君のところじつじつに善吉君が来ると思うよ。その後、めだかちゃんにも会い、善吉君の名言が出ると思うね。じゃ、バイバーイ。

b y 神
『

「ここが、めだかボックスの世界？あつ、善吉だ。」

「僕は人吉善吉。君の名前は？一緒に遊ぼうよ！」

こうして、ボクの第2の人生が始まった。そして、15歳の春、旧友人吉善吉と1年1組で再会を果たす。

スタート 第2の人生（後書き）

善吉の名言の意味は分かりますよね。ちなみに、病院でめだかや襖、飛沫達にも会っていて、病院は今でも残っています。原作ブレイク出たー！！

また過去については、番外編としてやっていこうと思います。

人間は忘れる生き物だ、とよく言っけど忘れられた人間の気持ちを考えてきたこと
サブタイトルは、いつもこんな感じにしたいと思います。

人間は忘れる生き物だ、とよく言っけど忘れられた人間の気持ち考えたことまで、
15歳の春を迎えた僕は、今日もまた校門をくぐっていた。そして、
常々思っている。箱庭学園でか！！

ついで、今日は、異常な女が人の上に立つ日だ。そう、今日は新生
徒会長発表日。

新生徒会長の黒神めだかが全校生徒の前で演説を始める。

「世界は平凡か？」

異議なし。

「未来は退屈か？」

たぶんそーじゃない。

「現実 is 適当か？」

Yes of course .

「安心しろ、それでも生きるとは劇的だ！」

安心なんかできっこない。ボクなんか毎日毎日恐怖の連続だ。

「そんなわけで本日よりこの私が、貴様達の生徒会長だ！」

今までの前置きは必要でしたか？

「学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい。」

悩み事は、いえないからこそ悩み事なんだよ。

「24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける。」

それは、ストーカーにまで発展する。

ってなわけで、めだかちゃんの発言に一言ずつ文句を言ってみてもボクは、それを面と向かって言えない。そんな、臆病者が嫌いだ。

ボクは、臆病者を恨みながら1年1組へと向かう。

すると、原作と同じく善吉と一人の少女が話していた。言わずも知れたブラックホールの胃袋を持つ不火知である。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ！人前に立つのに慣れてるつつつかさー」

その女子の言葉に、そばにいた男は反論する。

「カツ！あれは人の前に立つのに慣れてるんじゃないよ！人の上に立つのに慣れてんだ！」

そんな会話を聞きながら、ある問題に直面した。なぜか、二人は、ボクの席のところまで話しているのだ。せめて善吉とはもつと感動的

に再会したかったが、仕方ない。

「ちょっとそこいいですか？」

「あつごめんごめん、つてお前」

(感動的ではないが、気づいてくれるだろう。)

「どっかで俺と会った？」

つな、完全に忘れられている。まーいつか。他人のふりにて気づいたら脅かそう。実質、2ヶ月しかあの病院にいなかったし。

「えっ初対面のはずですが。」

「名前は？」

これって気づいてもらうチャンスだよな。うん、きっとそう。

「ニタ子樹」

「えっ!?!」

驚いてるぞ善吉。やっと気づいたんだね。

「男だったんだ。俺はてっきり女だと思ってた。」

「私も、私も」

「これから、一緒のクラスだ。よろしく。」

「よろしく」

「よっよろしくお願いします。」

シヨックだ。完全に忘れてる。これを若年性アルツハイマー病と言わずになんと言うだろうか。

と、落ち込んでいるボクの横で善吉が「俺は生徒会には入らない。なーんて言っただかちゃんに強制連行（笑）。ここで、ボクにもうひとつの疑問が。」

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょう、生徒会長さん。」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい。ニタ子同級生。いや、“樹”。」

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく 上

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょう、生徒会長さん。」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。昔のようにめだかちやんと呼ぶがよい。ニ夕子同級生。いや、“樹”。」

「おっお前生きてたのか。」

「いや、人を勝手に殺さないでくださいよ。でもなんで死んだことに?」

すると、二人が説明を始めた。

長かったのでまとめるところだ。

? 病院破壊未遂の容疑者になる。(もともと、飛沫達の“偉業”を阻止しすべての罪を自分のせいとし、助けたため)

? 転院指令を受ける。(いわば、追放)

? 転院先は箱庭総合病院の末端施設であったため、今まで以上の実験が行われるという話を聞く。

? 二人は死んだと思ひ込む。

「、というわけだ。」

「でも生きててよかったぜ。でも、なんでお前が1組なんだ？1組でもおかしくないのに。あと……。」

「あと？」

「お前、いつからそのー、女らしくなったんだ。」

「善吉よ、まさか樹に恋したわけではあるないな。樹は、あくまで男だぞ。」

「あくまで、ってボクそんな女に見えますか？」

「「見える！！」」

（ハモったってことは……）

樹の頭の上に負のオーラが漂う。

「そんな落ち込むでない、樹よ。」

「だって、ボクは真正銘男ですよ。なのに、女だなんて。」

「だから、女じゃなくて女に見えると言っただけだぞ。（こいつの心って昔から弱かったっけ？）」

「まーもういいです。で、1組にいる理由ですがまだ、理事長が気づいてないだけでたいした理由はありませんよ。」

「わかった。やっぱりお前異常なんだな。でもいいよ。こうして

昔と同じように話ができるから。」

っで、話は進み、今ボクは剣道場の前にいる。

「あ？誰だお前ら。」

「1年13組r y。」

今後面倒なのでさっさと説明すると、不信任2%の人たち（門司先輩ら）にめだかが『上から目線性善説』を披露し、それk

「おい、樹。どこ見ておる。もちろんお前も素振り千回だぞ。」

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく

上(後)

樹「まだここまでは、よかった。原作を読んでいるのでこの展開も予測していた。だから耐えられた。でも次回、……。」

さあどうなるでしょう。

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく

下(前)

祝PV3000 &ユニーク700

見た下さった方々本当にありがとうございます。

今後も『異常で過負荷な臆病者と無礼者』をよろしくお願いします。

感想大大大募集中!!!

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく

下

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

そして、めだかが倒れる。……。っておい！だれか突っ込んでほしいよね、ココ。あの異常の塊のような人が倒れたんだぞ。ボクの叫びで。

「すまない。ちょっとめまいがしてな。ここ数日頑張りすぎたな。」

おい、その言葉、あなたがもつとも言うてはいけない言葉じゃん。(えっとー、まー原因はめまいなんだね。よかった。)

というわけで、一件落着。とは、いかないのが現実の厳しさなんだよ。今日もまた、ボクは剣道場に来た。というより、善吉に誘われ、行ってみたらこの有様である。

「お前も来たのか。もちろん来たならそれなりのお礼をしなきゃいけないよな。」

「お礼なんて結構です。では、ボクはこの辺で。」

「お、じゃーな。っとでも言うと思ったか？甘いんだよ。」

(あと少し、あと少しで門司先輩達が起き上がる。)

「日向君？なっなんでこんな風になっているの？まずそこを教え

てもらいたい。」

「一生徒会長（バケモン女）に草むしりを頼んだんだけど、うまくいなくてねー。だから変わりにボクが草むしりをしているんだ。」

「じゃー雑草、って門司先輩方のことなんですか？」

「もちろん。あ、でもこうやって時間稼ぎしても無駄だぞ。あの女、今頃役員募集演説の真っ最中だから。」

（ココで、門司先輩の回想場面だな。いま、ボクは何を考えているだろうか？）

「ま、待てよ。勝手なこと吠えてんじゃねーよ。たったいま思い出したわ。俺は昔剣道少年だったんだよ……！」

（き、ギター。門司先輩かっこいい）

「うっぜ。ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろうとしてんじゃねーよ。剣道三倍段って知ってっか？ボクはあんたらの三倍強いって意味だ。」

（ココで善吉が立ちあが……らないっておい！！ココで原作ブレイクしちゃってんじゃん。やっぱボクのせいか……。だったら）

「し、真剣白刃取りだと？」

「そういえば、さっき剣道三倍段って自慢してたけど、初心者ボクには初心者になるの？ほら、 $0 \times 3 = 0$ でしょ。それとも、実

力って意味だったの？ならボクがそのプライドを切り裂いてあげよ。」

そして、門司先輩から木刀を借りる。（正式には、無許可だか）

「どいつもこいつも面倒くせー。お前剣道三倍段って知ってっ面倒くさいのはあなたです。ホント、ボクが安心できるよう静かにしててもらいますよ。」ッガ

ってことで解決です。善吉は、ボクの声で驚いたらしくそれで目が覚めたそうです。

その後、日向君も、めだかに『上から目線性善説』を披露され、無事改心（？）したとき。

っえ！樹、キャラ変わりすぎって？あれは、門司先輩方を雑草扱いしている日向君にされたからだよ。何が剣道三倍段だ。っと言うことを今日も言い出せず、胸に溜め込む臆病者^{ボク}だった。

人に何かおごってもらったとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ

樹「サブは、ボクの心の叫びです。」

有明先輩の話は、カットさせていただきました。本当にすいません。

人に何かおごってもらったとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ

ここは、食道だ。

おい、字が違つー！！食堂だよ。ブラックホール 不知火と一緒に。

なぜ、こうなったかと言つと・・・

昼食を取ろうとしたときのことだ。いきなり、善吉が

「樹、お前も今から食堂へ行くところか？もしそうなら、一緒に行こうぜ。」

「うん、いいよ。ところで、隣の人は？」

「あつ、こいつは、「不知火 半袖だよ」「ってことだ。」

「不知火ってことはまさか、理事長の孫ですか？（まー知ってるけど）」

「うん、そうだよ」

という訳で、ボクは今食堂にいる。でもなぜか二人っきりだ。善吉はトイレにいくと言いながら帰ってこない。

「あれ？善吉遅いねー。善吉には樹に言つなつて言つてたけど言っちゃうね。今日、樹のおごりつてことだから。」

「えっ？今なんて？」

「だから、樹が今日の罰ゲームおしりってことだから。」

「ぜ、善吉の裏切り者……！！！」

こうして、ボクの財布から諭吉さんが一人旅立っていった。

「待って、待ってくれー。諭吉殿。」

「何一人で言ってるの。馬鹿鹿みたい」

そのころ、神は

「皆さん、久しぶりの登場です。こう見えても、毎日樹のことはリアルタイムで観察しているからね。で、お金の問題なんだけど、電気代とかは、何とかなるけど現金はねー。月10万しか払えないから、おごりは残り9回しかできないね。ドンマイ、樹。」

「ヘークシユン！」

「樹、風邪引いたのか？」

「うるさい、裏切り者。善吉のせいで精神病にかかりそうだよ。夜もこれじゃー眠れないじゃないか。」

「有明先輩みたいなこと言うなよ。」

「なら善吉が言わせないよう、これ以上ぼくに精神的ダメージを

与えないで欲しいなー。」

「じゅめん。」

「まーいつか、じゃーね。また明日。」

「おう、じゃーな。」

今日は、今日で散々な日だった。こんなときに、もしも、ボクの怒りを買ったら、またキャラ崩壊しちゃいそう。あれ、今いたのは、

「貴様。王である俺の目の前を横切って走ってよいと思っているのか？」

よし、君はボクの怒りを買ってくれた。悪いけど、きょうは、そんなに安くないからね。

「もちろん。ってか、お前誰？まさか、自分で王様気取り？マジださ。ナルシストにも、程があるがあるぞ。お前のあってもないに等しい脳みそで考える。カスごときの分際が。」

やっと、裏人格オレが登場か。

人に何かおごってもらったとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ
やっと裏人格の登場です。やっぱ、現世でも相当嫌ってたからしか
たない。

最後のセリフの中に二人の言葉が入ってます。

だいたいオレは神だとか天才だとかといってる奴に限って実はたいしたことない

王土ファンの方々、申し訳ございません。

祝PV5000、ユニーク1000

「二子樹、1年1組だ。」

「1組だと??」

「悪いか?」

「いや、少しきにん『平伏せ』ツグハ!!な、何!!」

だが、王土が前を見たとき、そこには誰もいなかった。

「はー疲れた。これで、オレの恨みの1厘ほどは、果たせたな。
最後に、アイツの驚く顔見たかったな!。じゃ、そろそろ、選手交^{バトントウ}
代だ。」

樹の人格が元に戻る。

「あつ、あれ王土は、どこ行ったのかなー。まーボク、あん時怖
かったしいつか。」

そのころ神

「よく考えれば、裏人格も異常、元から持ってんじゃん。」

だいたいオレは神だとか天才だとかといってる奴に限って実はたいしたことない

異常紹介

バトンタッチ
選手交代

特定の人間と場所を入れ替えることができる。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

樹「動物なんか二度と近づいて来るな。」

めだか「私のところには、なぜ動物が近づいてこないんだ？」

善吉「そんななら、足して二で割れ。」

樹&めだか「それができればこんな苦勞はせんわ!!!!」

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

「今日も、いつものようにただただ普通に登校した。だから、今日はボクにとって厄日の始まりだとはまだ気付かない。」

「ボクは、今生徒会室にいる。理由は、ご想像にお任せします。まー強いて言うなら成り行き。そう、成り行きでここにいる。そこに、今日もあの女がきた。」

「今日も、依頼が来てるぞ。ところで、樹は、何だ？その服装。」

「これですか？ただ制服の下にじゃーズで、デビルカッター。」

「善吉？」

「これ、めっちゃカッターじゃん。」

「さすが、善吉。この美的センスが分かるか。まさに時代の最先端ってやつだろ？」

「確かに」

「この服は、・・・」

五分後

「……、というわけ何だよ。」

「確かに、デビルカッター。」

「（私には、ただ時代についていけてない気がするが。）と」
ろで、二人とも。」

「なに？」

「今日の依頼だが、犬が迷子だそうだ。私が動物嫌いなことは二人も知っておるだろう？だから、頼んだぞ。」

そして、目撃情報のあった庭に三人は、向かう。えっ！1人多いって？それは、なんでか不知火が、ついてきたからだ。

「善吉。犬はどこにいるんの？」

「え〜と確か庭の近くで見たっていう目撃情報が……」

「ん？」

まさか、あれが？（知ってるから憎まれ知らずはOFFにするけど）

「あの犬だね」

御察しの通り、ボクらの前には、犬なんかいなかった。その代わ

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近
最後の文？字稼ぎのようでは字稼ぎでない。いや、すいません。あれ
はもろ字稼ぎです。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

ちよっと、今回は長めです。

「さつきから、二人とも犬モンスターって言ってるけどあれはボルゾイという犬だよー 別名ロシアンウルフバウンド」

「ウルフって入ってんじゃん!!!」

二人の息ぴったり。と思ったとたん、

ガルルル!!!

鳴き声怖っ!!!

「ほら」こつちにおいでよお兄ちゃん!一緒に遊ぼうよ!」って
言ってるよ」

「いや俺には」人間ども!今度俺の眠りを妨げたら噛み殺すぞ!
!」って聞こえるね。」

「ボクには、」あの、善吉って言う人間と一殺し合い(遊び)た
い!」って聞こえる。」

「樹。オレは、今のお前を仲間と思ってるいいのか?」

「うん。善吉は、今ボクの大切ななかまだよ。」

「もういい。っで、本当にあいつ捕まえるのか?あきらかに死亡
フラグ立ってんだけど。不知火は手伝ってくれるんだよな。」

「え?あたしが?やだよ?あたしは親友のあんたが酷い目にあう

のを笑いながら見ていただけの人間なんだから」

「お前、本当に友達か？」

「もちろん。大切な道具ともだちだよ」

「“ともだち”の字は何だよ！」

「捕まえにいくときに、これを持って行って欲しいの」

そういつて不知火が取り出したのは・・・

ソーセージ

「なるほど！こいつを餌付けに使っわけだな！！」

「んーんそうじゃなくてさ！これをお腹に仕込んでね「ぎゃあああ！！！！内臓喰われたー！！！！と見せかけて実はソーセージでした」っていうギャグをやっしてほしいの」

「そのギャグさあ、やった2秒後にマジで食われるよな？これが、お前流道具オレの使い方か。」

「そっだよ」

「ひでえ。・・・くそっ！行くしかねえか。不知火！そのソーセージ貸せ！」

「善吉。『行くしかねえか』じゃなくて、『逝くしかねえか』で
しよ?」

「いや、まだオレの人生始まったばかりだから。」

「安心して。君が死んでも、自殺扱いにしてもらうから。」

「オレ、お前にそんな恨みを買った覚えがないが。」

『へえー覚えてないんだ。この前、不知火と3人で昼食をとりに行つたとき、ボクを裏切つたくせに。』

「なー！ー！！あれは、すまなかつた。オレの財布も寂しかったんだ。ごめん。」

『ボクの諭吉さん、どうしてくれるかなー。』

「わかつた、金払うから。」

『いいよ。それよりも早く善吉の死に様、見せてくれよ。』

「その後、善吉は、見事な死に様を披露して、旅立って行つたのだな。」

「そつじつとです、めだかちゃん。」

「おい、オレはまだ生きてるから！勝手に殺すな（まー死にかけてが）」

「つで、犬の確保は？」

「無理だった。っていうか、あれは犬じゃない。」

「でもこのままじゃまずいよ。近いうちに保健所が動き出すだろうし。」

「保健所だと？」

「確かに保健所行ってきたのはかわいそうだな。よし二人とも行くぞ！」

「だめだよ、善吉が死ぬのはいいけど、今度はボクまで死んじゃうよ。」

「ふむ。樹が死ぬのは困るな。」

「おい！二人とも、オレが死んでも困らないのか？」

「「もちろん（うん）」」

「ち、ちくしょー。」

「いや、善吉。そこで悲しむって、自意識過剰すぎるよ。」

バキッ
！！

「何の音だ？」

「善吉の心が折れたんだよ（笑）そつとしておいてあげてね。」

「ああ、分かった。では本題に戻すが、

この件は、私も動こうではないか。」

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

不知火「ねえねえ、なんで途中、樹が」で話してたの？」

作者「」の部分には善吉へのすさまじい憎悪を表しています。」

樹「あれは自業自得だよ。まー諭吉さんの恨みってやつだよ。」

善吉「じゃあ、なんで途中からあんなに毒舌になったんだ？」

樹「あつ！善吉生きてたんだ。」

善吉「おい、作者。どうなってんだ。」

作者「ただ、単純に君を痛めつけるために、見稽古で不知火の毒舌をコピーしただけです。」

善吉「そんなかんじ」「」「うるさい！」「」、すいません。」

これは、樹&不知火&作者

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

めだかちゃんも参加し、第二回犬捕獲大作戦モンスター決行中。

「で、なんだその格好は？」

な、なんとめだかちゃんが犬の格好で登場！（ボクは原作を知っているので驚かないが）これも、ある意味犬だモンスターよね。

「ターゲットに仲間だと思ってもらう作戦だ！動物と触れ合うにはまずこちらが動物の立場にたって考えてみるのが大切だからな。」

な、なんてバカなんだ！。この人って天然だよね。というか、天然以外のなにもでもない。

「なんだ？樹。この作戦、不満でもあるのか？」

「い、いやー。この作戦のほかに何か秘策でもあるんですか？たとえば、麻酔とか。」

「ない。」

「で、ですよねー。」

ボクは、今日学んだ。この人、異常であり、異常だ。てんねん

っと話している間にも犬発見！ターゲットと思ったら、散歩中の犬だった。

「しかし、あれがこんかいのターゲットか。」

「いや、絶対に違います（違うから）！」「

誰だよ、こんなところで犬の散歩してんのは。いくら、小さいからってボクには怖い。やっぱ動物は、無理だなー。（憎まれ知らず^{アンリセント}は、OFFにしてある。）

「この犬、かわいいなー」

「善吉、こいつがかわいいなら犬もかわいがってやれ。^{モンスター}」

「いや、あれとこれとは別だから。」

「だが、樹。確かにかわいいぞ。」

そういつて、犬に近づく。すると・・・。

まー、御察してください。

さっき、めだかが近づくとつれて犬が後ずさりしていたが、

「さあ怖くないぞー！一緒に遊ぼうじゃないか！」

ついに耐え切れずに、善吉の後ろに隠れたんですよ。（ボクじゃ

なくてよかった。(

と思ったのも、つかの間なーんか見覚えのある犬がボクの後ろにいたんですよ。

「い、樹、後ろー!」

「うわあああああああ!?!?!」

「あれが、ターゲットいぬか。さあ怖くないぞ!?!一緒に帰ろうじゃないか!」

「!?!?!」

アンリセント残念ながら、これは、モンスター犬の驚きではない。ボクの驚きだ。なんで憎まれ知らずはOFFにしてあるのにボクに懐いてんだ!。

「……というわけでモンスター犬は無事飼い主の元に帰りました。まあとりあえずは一件落着かなど。えーと大丈夫かめだかちゃん。生きてるかー」

めだかちゃんは、めっちゃプルプル震えてる。

「私は、あんな可愛いわんちゃんにもなついてもらえないなんて、私はどうしようもなくダメな人間だ……」

えーとめだかちゃん、まーとりあえず……

「えーと大丈夫か樹。自殺するのはまだ早いぞー」

ボクは、周りにどす黒い負のオーラを出していたそうだ。

「ボクは、どんなに生き物に懐いてもらえても受け入れることができないなんて、ボクはどうしようもなくダメで、クズで、底辺にしか存在してはいけない人間だ。うん、よし、死のう！」

だ、ダメだコイツ。めだかちゃん以上に自虐的になってるし・・・。なんだか、二人対照的だなー。めだかちゃんは、動物が好きなのに動物がめだかちゃんを苦手なものに対し、樹は、動物が苦手なものに動物が樹を好きだなんて。これこそ、足して二で割りたいね。

「それができたら、こんな苦勞はしない！！！！」

そんなことで、善吉は僕たちを2時間慰めなければならなかった。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

作者「憎まれ知らず（アンリセント）の弱点発覚です。（樹だけで
すが）動物が好きになるのにON・OFFはつけれないのだ」（笑）

「

樹「作者死ねーーーー」

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずに行われると案外簡

祝PV12000、ユニーク2100

読者の方々本当にありがとうございます。感想、募集中です。

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずに行われると案外

「あれ？ここは、どこ？」

ボクは、真っ白な世界にいた。まるで、転生のときにいたあの空
間のようだ。でも、ボクは確か寝ているはずなのに。

「そうだよ、君はまだ寝ている。つまり、夢の中ってことさ。」

振り向くとそこには1人の少女がいた。

「あなたは、「知ってると思うけどボクは安心院なじみ。平等な
だけの人外だよ。」ですよ。ここには、アリバイブロック腑罪証明を使って来たの
ですか？」

「もちろん。でも、君に危害は与えないよ。ただ・・・」

「ただ？」

「ボクのスキルを受け取ってほしいんだ。」

「え？でも、ボクは別にスキルには困らないんです。それから、
ライフゼロ無効脛で、ボクの憎まれ知らずを無効化しているみたいですけど、
アンリセント無駄ですよ。」

「なるほど、君の見稽古は、アイゲームチートだね。」

「（あなたのほうがチートだと思っただけ。）」

「ボクも、そしてめだかちゃんもチートだけど君には及ばない。それをまだ気付いてないだけさ。」

「心読むのが好きですねー。でも、ボクそろそろ帰りますんで。」

「それじゃ、また会おうね。それから、ボクのこととは親しみをこめて『あんしんいんさん』と呼びなさい。」

「では、さよおー」

ボクは誰かに言葉を遮られた。いま、ボクの唇はボクのものではない。

「つて、なにキスしとんじやー。ボクの、ボクの大切なファーストキスを奪いやがって。このチートクソババアが。」

「大丈夫。これも口写リップサービスしだから。」

「つて、どんなスキルをくれたんですか？」

「それは、絶対防壁リフレクトプロテクターさ。あ、もうそろそろ時間だ。楽しかったよ、最後に……」

ボクの意識はここで途絶えた。

朝から、騒がしい目覚ましの音で起き上がる。さあ、楽しい一日の始まりだ。

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずに行われると案外簡単
作者「絶対防壁の説明は次回でいいでしょうか。」

樹「お、ついにネタ切れですか。」

作者「そんなことあるわけないでしょう（汗）」

結局紹介します。

リフレクトプロッカー
絶対防壁

あらゆるものを固めることができる。寒天状であるため、反射可能

これまでのスキルのおさらい、といいながらただまとめただけじゃん！！

これもでのスキルのまとめです。

これまでのスキルのおさらい、といいながらただまとめただけじゃん！

二夕子樹 表人格

アブノーマル
異常

アイゲーム
見稽古

見ただけで、相手の異常や過負荷を使うことができる。また、それと同時に、弱点も見極められる。ただし、最初の1回は、50%しか使うことができず、異常や過負荷自体を無効にすることはできない。現世で、すでに使っており、皆から恐れられていた。ちなみに、相手の技、運動能力等もコピー可能。

アンリセント
憎まれ知らず

神に転生するときにもらった。どんな動物にも敵視されない。ただし、人間には無効。また、自分は過負荷の対象にされない。これは、ON、OFFの切り替えができる。(動物に対するON、OFFは効かない)

リフレクトブロッカー
絶対防壁

安心院さんからもらった。あらゆるものを固めることができる。寒天状であるため、反射可能。使い道として、盾、足場、食事などに使える。

マイナス
過負荷

????

二夕子樹 裏人格

マイナス
過負荷

トレチャリィティル・ナ・ノーグ
裏切りの楽園

異常のみ、相手から奪い使うこともできる。これも、ON、OFF可能。また、無効にできない代わりに、奪った異常は200%使うことができる。これは、安心院さんにも有効。さらに、人も操ることがができる。(1人だけ)

アフノーマル
異常

バトインタッチ
選交代

特定の間と場所を入れ替えることができる。ただし、相手を認識しなければならぬ。表人格から、変わるときに使用。

これまでのスキルのおさらい、といいながらただまとめただけじゃん！！

ちなみに、絶対防壁の食事とは液体（甘いもの）をゼリーに変えます。作者は、ゼリー大好きなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6296x/>

異常で過負荷な臆病者と無礼者

2011年10月26日11時11分発行